教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会
発行者　大　網　信　祥
編集広報部

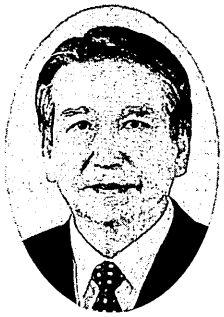
もくじ

◎関ブロ新潟大会報告 …… 2・3
◎県研究大会講演会・係報告 …… 4・5
◎県研究大会分科会報告 …… 6～19
◎特色ある学校 …… 20
◎地区だより …… 21
◎ひろば …… 22

凡事徹底

巻頭言

栃木県連合教育会長　新　沼　隆　三



いわゆる「朝活」が質量ともに広がりをみせている。セミナーや資格取得、英会話、スポーツジム等、バラエティーにも富む。これらは主に自己研鑽活動だが、家族との時間を捻出するワーク・ライフ・バランスの一環として定時帰宅、早朝出勤に踏み切った人の話も聞く。これには、自由に使える時間がここにしかないということに加え、朝の時間の効率性という側面もあるようだ。

私も朝活派に転じ十数年になるが、習慣化すれば必要な睡眠を確保しつつ、２～３時間程度の時間を生み出すことはそう難しいことではない。現職の先生方にも、ライフスタイルの再構築として、検討してみる価値があるように思えるがどうだろうか。

ところで、部下育成の時間がなかなか生み出せないといった声を管理職の先生方から聞くことがある。管理職、特に教頭先生方は慢性的な業務過重状態にあることは承知しているが、それでも部下育成は主要な職務である。という私も、現役時代を思い起こすと汗顔の至りで、部下育成を語る何物も持たないが、こだわりをもって取り組んだものもある。ＯＪＴによる情報活用能力の育成で、それは主に起案やその進行管理、報告・確認等の場面が中心になる。そこでのこちらの基本スタンスは、端的には指示・助言中心か質問・確認中心かということになるが、その判断は業務ごとの部下の理解度、準備状況等に基づく。これらはそう頻繁にあることでもないので、併せて、教育者として、また社会人・家庭人としてどんなふうに成長していきたいのかといった「ざっくりとしたキャリア目標」にもふれながら、自分の経験や思いも伝えていく。何の変哲もない取り組みだが、こうしたインフォーマルな積み重ねがキャリア目標を今一歩描き切れていない職員の後押しになる。目標が明確になれば当然、情報収集・選択能力等も格段に高まり、やがてはモラールの向上に結び付いていく。子どもも大人も一緒である。

また、情報活用能力の下支えとなる読書について、管理職時代の私は、ビジネス書の類を読むことが比較的多かったが、そこから得たものは少なくなかったように思う。成果のほどはともかく、異分野には教育に通ずる貴重な情報・教訓等が豊富に内在しており、そちらの例のほうがむしろ客観的・具体的で部下に伝えやすいものが多かった。教頭先生方には、ぜひ資質向上の一助として「異分野・異業種」にも着目してもらいたいと思う。ちなみに、私の読書スタイルは、目次読み、前書き・後書き読み、項目抜粋読みといった「ちょこちょこ型」で、私の朝活の中心メニューである。

学校職員の勤務環境が年々厳しさを増し疲弊感も窺える状況下、自己防衛的意識や個業化傾向の高まり、自己研鑽の痩せ細り等が憂慮される。教頭先生方には、学校文化としての協働的な風土の維持・向上と健康、仕事の専門性、安定した人間関係等楽しく働けるための条件整備に更なる奮闘を期待したい。

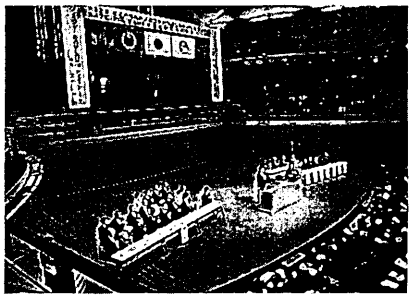
関ブロ新潟大会報告

第52回関ブロ研究大会新潟大会に参加して

宇都宮市立篠井小学校　長谷川　　智

第52回関ブロ研究大会が、11月10日(木)・11日(金)の２日間、新潟県新潟市において「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして～未来を拓く子どもをはぐくむ学校づくり～」の研究主題のもと開催されました。昨年度の開催県である本県からは約70名が参加しました。

一日目は、晴天の澄みきった青空の下、信濃川を見渡せる新潟市民芸術文化会館（りゅーとぴあ）で全体会が行われ、佐渡市を拠点に海外でも活躍している太鼓芸能集団「鼓童（こどう）」による力強い太鼓のアトラクションで大会の幕を開けました。引き続き開会行事があり、さらに新潟県生まれの写真家、天野尚（あまのたかし）氏による「ファインダーから見た自然～アマゾンと佐渡から～」という演題で記念講演が行われ、世界中の「手つかずの自然」を撮影した貴重な記録写真をもとに、自然破壊・環境破壊の現状や今後の環境教育の重要性について熱弁を振るわれました。



二日目は、生憎の雨となりましたが、各会場に分かれて終日参加型の研究会となりました。全国統一研究主題のもとに設定された全国研究課題と関東ブロック研究課題の６課題14分科会に分かれて、未来を拓く子どもを育成するための実践例や具体策、さらに研究の成果と今後の課題等が提案されました。その後分科会ごとのテーマに沿った課題解決に向けてのグループ協議の中で、とても濃密で活発な意見交換が行われました。各学校において教育改革を中心となって推進する副校長・教頭の役割やその責任などについて、各都県の先生方と再確認することができ、大変充実した分科会となりました。

写真家　天野尚さんの記念講演を聞いて

栃木市立栃木南中学校　石　川　優　一

天野さんの小学生のときのなりたい職業は冒険家。写真家になった動機は、中学のときに自転車で東京遠征して撮った写真が女生徒に売れたからという。20才でケニアに行き、以後赤道下の西アフリカ、ボルネオ、アマゾン等で写真を撮り続けてきた。子供のときの夢をそのまま実現するたくましい人なのだ。

アマゾンの流域面積は日本の国土の19倍。どこへでも船で移動できる。褐色の川の中は、有名なピラニアに限らず、ワニ、人食いナマズ、巨大ヒルやエイ等、危険だらけということで、現地人のガイドでさえ、カメラを担いだ天野さんより前に出てくれないらしい。体感温度60℃のなか、湿気を防ぐためにタオルをかけた蛇腹カメラで、天野さんが撮られたアマゾンの写真の数々がスクリーンに映し出される。天野さんはそれぞれの写真に「アマゾンの石庭」「最果ての地」「白昼夢」などと名づけて、自然の摂理がいかに素晴らしいかを伝えようとされていた。そして、その素晴らしい自然が、ジャングルの伐採や焼き畑で少しずつ失われつつあることも。

後半は天野さんの故郷、佐渡の写真となる。リマン海流と対馬海流がぶつかり、温暖と寒冷をあわせもつ自然が産んだ独特の風景。風雨のなかでも花を散らさない千竜桜。強風に表皮をはぎ取られながら断崖に立つ杉。ときに塩をかぶる海沿いの佐渡の棚田は世界農業遺産に登録されたそうだ。地球の裏側のアマゾンと同様、自然破壊がこの佐渡でも進んでいる。本来なら美しく紅葉する山一面のミズナラが枯れている。トノサマガエルも赤トンボも減っているという。この５年自然はガタガタになりつつあるという。我が国の環境保護は２流どころか３流。その原因は環境についての教育が足りないことだという。「自分たちの地球を守らないで何ができるか。自然教育をやってください。」という結びの言葉は我々へのメッセージだ。

第１Ａ「教育課程に関する課題（小）」分科会に参加して

市貝町立小貝中央小学校　手　塚　朗　彦

第１Ａ分科会では、「小中一貫教育」推進における教頭の関わり（千葉）並びに、キャリア教育の視点に立った教育課程の編成・実施と教頭の役割（新潟）の提案を受け、話し合いの柱を、教頭として職員の意識をどのようにして高めていくか、既存の考えから１歩踏み出そうという意識改革をどう進めていくかとしました。

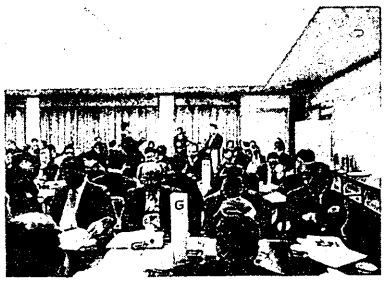
子どもの育ちを第一に考え、９年間の見通しを持った指導にどのように関わっていくか、また、キャリア教育を「生き方教育」としてとらえることで、全職員が共通の目標のもとに子どもたちに関わる体制をどう作り上げるかなどが話題になりました。

他県の先生方と共通の課題で協議できたことで、大変勉強になりました。

関ブロ大会新潟大会分科会に参加して

佐野市立吾妻中学校　須　永　知　子

２日目の分科会は、「子どもの発達に関する課題（中学校）」に参加しました。不登校ワースト１からの脱却を目指した山梨県、人間関係づくりに主眼を置いた佐渡市からの実践発表を受け、グループ協議ではそれぞれの地区の実情を踏まえた情報交換が活発になされました。不登校を防ぐ取組では小中連携を含めた組織づくり、関係機関との連携等々、教頭としての役割、責任の大きさを改めて実感しました。人間関係づくりの実践は、本校も重要な課題として取り組もうとしている内容でもあり、大いに勉強させていただきました。最後に、指導者の「教頭はもっと柔軟な発想で提案や方針をだしてください。最後の責任は校長がとるのですから。」という言葉に、妙に励まされたわたしでした（?!）



４ヶ年研究の集大成

那須烏山市立荒川中学校　山久保　拓　男

南那須教頭会では、本研究大会で提案するということから、今年度は新しい課題での研究を小学校会員が、今までの研究を中学校会員が継続するという二本立てで研究を進めてきました。研究を推進する上で多少とまどいもありましたが、提案者を中心に全会員が協力して研究に取り組むことができました。

本研究大会の分科会では、その研究内容を提案し、それをもとに「保護者の主体性を引き出すＰＴＡ活動における教頭の役割」「地域の教育力を生かすための教頭の意図的なかかわり」についてグループに分かれて話し合いを行いました。私の参加したグループでは「地域人材への謝金や保険は」「教頭がＰＴＡや地域と直接かかわったのか」「ＰＴＡとの懇親会は」「ＰＴＡ役員会や実行委員会の開始時間は」「地域人材の活用状況は」など、より細かい点についてまで踏み込んで意見交換を行いました。

最後に、指導者から、「地域人材を活用するためには、年間の教育活動において必要とする資源（人、もの、こと）がわかるようにしておく」「外部の教育資源を有効に活用するためには、校内に外部連携のためのシステムが必要である」など、示唆に富む指導助言を頂きました。

今回の研修で学んだことを、今後の教育活動に生かしていきたいと思います。

関ブロ新潟研究大会での提言発表を終えて

那須烏山市立烏山中学校　吉　澤　　卓

11月10日、11日の２日間に亘り、第52回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会新潟大会が新潟県新潟市で開催されました。

栃木県を代表しまして、第３（３）分科会「ＰＴＡ及び地域社会に関する課題」において南那須小中学校教頭会が提言発表を行いました。発表は烏山中学校の吉澤と七合中学校の小口で担当し、研究主題を「ＰＴＡ及び地域社会との連携の在り方と教頭とのかかわり」、副主題を「～学校・家庭・地域社会のかかわりを深める実践をとおして～」という内容でした。参加者の多くが自分でＰＴＡ事務局を担当して活動にかかわったり、地域ボランティアの調整役となったりしているため関心も高かったようです。質疑応答のときにも、実際にどのような業務をどの程度までかかわっているのかといった話題にもなりました。

発表後のグループ協議でも活発な話し合いが行われ、ＰＴＡ活動の特色ある改善事例や活発化に向けた工夫、他校種の参考となる実践活動など、今後の取り組むべき課題などについて情報交換ができました。指導助言者の新潟県下越教育事務所社会教育課長里山政信先生からは、「仕組む・仕掛ける・つなぐ」ことが充実したＰＴＡ活動の継続につながること、地域教育力の活用を通して学校も「地域づくり」に貢献し、やがては地域が学校の大きな支援者・応援団となるようにすることが大切であるとの貴重な助言をいただきました。少人数の地区ではありますが、今後の研究課題について取り組んでいきたいと思います。

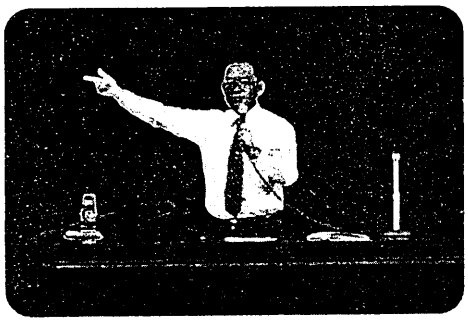
第 49 回 研 究 大 会

講 演 会

副校長・教頭の固有の役割

—豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして—

国立教育政策研究所　初等中等教育研究部　総括研究官　藤 原 文 雄 氏



今日お話し申し上げたいのは、全部で三つです。まず一つ目は、豊かな人間性と創造性について、二つ目は、その中で教頭先生固有の役割について、三つ目は、職員指導についてです。

一つ目の柱である豊かな人間性と創造性をはぐくむためには、「人とかかわる力」や「じっくり考える力」が必要です。特に「じっくり考える力」は、新しい学習指導要領で言っているとおり、「言語活動」です。まずは自分で考える。能力というのは使っただけ伸びると思います。考える子を育てようと思ったら、考える時間をとらなければいけません。例えば、ミスユニバースの大会があります。ミスユニバースにはいきなり選ばれて出るわけではなく、いろいろな選考過程を経て選ばれていくのです。その過程においては、まず美しくならなければいけない。そのためのプロデューサーのような方がついて大会に出る人たちを応援しているのです。「では、美しくなるためにはどうしたらいいですか。」とそのプロデューサーに問うたインタビューがあります。「一日の時間をすべて、美しくなるために使うのです。」というのが答えでした。毎日、美しさというものを考え続ける、限られた時間の中で、美しさのために投資をするということです。ですから、考える子をつくろうと思ったら、自分で考える時間を当然とらなければいけない。じっくりと聞く時間をとらなければいけない。自分の考えとすり合わせる時間をとらなければいけない。そして、表現する時間をつくらなければいけないのです。私が今日お伝えしたいのは、それだけではありません。確かに人とかかわる力も大事だし、考える力も大事ですが、「根っこ」のほうが大事だと私自身は思っています。よく学力論でも根っこということがあります。根っこというのは「自分が価値があると思える。」ことだと思います。そうしないと安心してかかわれない。自分が心のお守りをもっている子どもを私は育ててほしいと思っています。

二つ目の教頭先生固有の役割については、教頭職というのは、全体から見たらこう見えるよと、全体を見ながら意味付けてあげることです。学校というのは裁量が大事です。でも、開き直れば許される空間でもあるのです。自分で子どもと向き合いながら変えていくのですが、成功体験・失敗体験の中で、今まで培ったもので前例踏襲することを許されてきた空間でもあります。それに対して、社会の変化の中で、裁量は大事だけれども、そのメタ認知を強力にやっていくのが教頭先生です。社会はこうなんだから、あなたの思いも大事だけれど保護者の目を見てごらんと、いろいろな当事者の思いを調整しながら刺激を与えていくのが大切な役割なのです。

三つ目の職員指導では、皆さんは仕事を振るにしても常に職員指導です。自分の仕事が在任の間に減っていくのが理想です。いつまでも在任時と同じ仕事をしている教頭先生は、それだけ育てられていないということです。自分が在任している間に職員を育て、自分がだんだん後に引けるかどうか。そのために仕事を振りながら育てていくことが大切なのです。そこで、分掌の会議とかは、それを育てる道場として、教育観を耕してやっていくことだろうと思います。また、教頭先生は管理職なので、「会議の開始時間やルールの徹底を図る。」このあたりは教頭先生ならではの職員指導です。これができるのは教頭先生だけです。管理職として重みをもって職員指導ができるのは、教頭先生ならではです。そこを避けずしっかりと行ってほしいと思います。

最後に、豊かな人間性と創造性のためには、最初に述べましたように根っこが必要です。ぜひ皆さん自身が根っことこだわりをもった教頭先生であってほしいと思います。学校の中にはいろいろな仕事があります。皆さんは、校長補佐としていろいろな仕事を全部見ながら、全部をやることではありません。事務職員や教員を育てながら、自分がやらなくても回る仕掛けをつくるのが教頭なのだと思います。どうぞ頑張ってほしいと思います。皆さんの頑張りが日本の未来、社会の未来に大きく貢献すると確信しております。

長い時間ご清聴いただきましてありがとうございました。

研究大会に参加して（案内・接待係）

宇都宮市立清原南小学校　川　村　一　恵

立冬も過ぎ、日に日に寒さが増してきた大会の日の朝でしたが、会場は研究大会の朝に相応しい張りつめた空気が漂っていました。係の打ち合わせ後、早々に、当日のスケジュールを確認し、湯茶の準備をしました。迅速な対応、そして誠意をもって心をこめて接待することを、心掛けました。事務局の方の、隅々まで行き届いた細やかな計画と準備のおかげで、私たちは接待の責務を果たすことができました。接待は、研修会にとって、欠かすことのできない大切なコミュニケーションであるとともに、今大会をより一層広げ深める大変奥深いものだと思いました。研究大会、そして、今回の係として大会に関わることを通し、一層充実した研修会となりました。

研究大会分科会に参加して（運営責任者として）

宇都宮市立若松原中学校　樽　井　　久

私が担当しました第２Ａ・第２Ｂ分科会は、提言者、司会者、記録者、会場係の皆様の協力によりスムーズに会場準備が進み、昼食を兼ねての助言者との打合せでも、和やかな雰囲気の中での会食となりました。分科会が始まり、特にグループ協議では、会員の皆様が活発に意見を交換し合い大変有意義な時間であったと思います。助言者の先生から次年度の研究に向けたご指導をいただき、充実した分科会が無事終了しました。昨年度本県で開催された関ブロ大会の成果は、研究のみならず運営や会員の皆様の参加意欲にも現れていると強く心に残りました。最後に、ご協力いただきました会員の皆様と事務局のきめ細かな事前準備に感謝申し上げます。

研究大会分科会に参加して（提言者として）

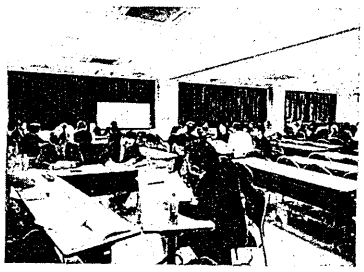
宇都宮市立陽西中学校　湯　沢　一　郎

第４Ａ・Ｂ分科会「組織運営に関する課題」に関して宇河地区中学校副校長・教頭会として「元気な学校づくりをめざした学校組織の活用」をテーマに、提言発表を行いました。テーマに迫るためのサブテーマが「学校組織マネジメントの手法を活かして」です。時間のない中、効率的に研究を進めるための協力と分担は、正に組織マネジメントを実践する良い機会となりました。

私の発表はつたないものでしたが、多くの仲間の支えを受け、その任を果たせたことに感謝の意を表します。まだ、研究も３分の１が終わったところです。次年度はさらに研究が深まり、同時に同じ地区の仲間との親交も深まっていくことで、元気な学校づくりにつながることを期待しています。

グループ協議に参加して

宇都宮市立海道小学校　大　沢　智恵子



４Ａ分科会「学校の活性化を図るための組織・運営のあり方」、４Ｂ分科会「元気な学校づくりをめざした学校組織の活用」どちらの発表も、第九期の１年次ということで、アンケートによる実態把握から課題を見出して、これからの研究の方向性や教頭としてのかかわりを考えていました。
提案後のグループ協議では、特にミドルリーダーの育成や小中連携、授業力向上、それらのための職員室経営等について活発に意見交換されました。各校での教頭としてのかかわりも情報交換できて有意義な協議になりました。

研究大会分科会報告　豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして

第１Ａ・Ｂ分科会　教育課程に関する課題（小学校・中学校）

豊かな人間性と創造性をはぐくむ教育課程の工夫・改善
－日々の教育活動における教頭のかかわり－

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　新村　幸江　先生
提言地区　芳賀地区　小中学校教頭会

『生きる力』をはぐくむ学校をめざして
－特色ある教育課程の実践をめざして－

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　新村　幸江　先生
提言地区　上都賀地区　中学校教頭会

１　提言趣旨

(1)　芳賀地区小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

生きる力の育成・豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校教育の実現に向け、教育課程をどのように工夫・改善し、教頭としてどのようにかかわるべきかを追究する必要があると考え本題を設定した。

今年度は、３年間継続研究の初年度であり、課題を整理し、教育課程改善の方策を検討していくこととした。

イ　研究の概要

豊かな人間性と創造性をはぐくむ教育課程の工夫・改善に関するアンケートを実施し、分析した。

また、実際に本地区の教頭が積極的に取り組んでいる事例について、関与表を作成し提示した。

ウ　成果と今後の課題

豊かな人間性や創造性をはぐくむために、教育課程の編成・実施において、教頭として実際に取り組んでいること、教頭としてのかかわりに改善すべき課題があることについて把握することができた。

また、実際に取り組んでいる事例について関与表を作成することにより、豊かな人間性や創造性をはぐくむための、望ましい教頭のかかわりが明確になった。

今後は、半分以上の学校が課題として挙げた「道徳教育の充実」「家庭・地域との連携」「豊かな体験活動の充実」「授業の質的改善」について、実践を通して検討し、改善を図りたい。さらに、言語活動の充実も踏まえながら研究を深めたい。

(2)　上都賀地区中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

中学校では、来年度から新学習指導要領が完全実施される。今回の改訂でも「生きる力」は引き継がれ、また、「特色ある学校づくり」も継続されることとなった。

そこで、本地区は「『生きる力』をはぐくむ学校をめざして」－特色ある教育課程の実践をめざして－をテーマに研究を進めることとした。

イ　研究の概要

３年間継続研究の初年度である今年度は、研究主題の設定と研究計画の策定を行い、そのテーマに沿った各学校の取組についての調査をし、問題解決のための具体策を検証した。

ウ　成果と今後の課題

本地区の「特色ある学校づくり」とそれにかかわる「教育課程の編成」の状況を把握することができた。また、副主題「特色ある教育課程の実践」を実践例をもとに深めたことで、一連の流れや方法が確認でき、「特色ある教育課程」の推進においては、『教頭の役割・関わり』について再認識することができ、新たな課題が見つかった。

今後は、「特色ある学校づくり」「特色ある教育課程の実践」のために、現在の大きな流れや留意点を再確認し、教頭の役割と具体的な取組について、実践事例を更に調査・分析していきたい。また、「特色ある教育課程の実践」のために、教頭が関与する課題を明確にして、教頭の関与の『一般化・マニュアル化』を検討していきたい。

2　グループ協議内容

(1)〔う班〕

○芳賀地区の提言に関して

・研究内容が具体的に示されておりわかりやすい。（「関与性」の評価が高く活用を図りたい。）

・道徳教育の充実を図ることが課題となっている。（「関連性」の検討をしている。）

・言語活動の充実のため授業を見合っている。

○上都賀地区の提言に関して

・どういう活動が子どもに効果があるのか、学校で意見を集約する必要がある。その中で学校の独自性が表れてくるのではないか。

・アンケートを今後の研修に活用したい。

(2)〔き班〕

・二つの地区ともに、主題にせまった発表で素晴らしい。教頭として教務主任やミドルリーダーに働きかけをし意欲を持って取り組むための指導・助言をする。

・すべての職員が力を十分発揮できる協働性のある職場づくりに努めたい。（認める、励ます、賞賛する）

○芳賀地区の提言に関して

・同僚の具体的な取り組みであり素晴らしい。

○上都賀地区の提言に関して

・それぞれの地域の特性や歴史を踏まえた活動に加えて工夫・改善を図っている。

(3)〔こ班〕

・話し合いで確認できた大切なことは、次の２点である。

①校長の経営ビジョンを生かす。

②全教職員が主体的に取り組むよう働きかける。

・「地域、学校、教頭」の違いについて各先生方が自分の学校を踏まえながらの発表となった。

・地域の違い

地域の教育資源を生かす。教頭が細部にわたって趣旨説明を行う。教務主任や担当者と連絡調整を行う。

・学校の違い

小中、異校種間、統合等学校の実態を把握したうえでの教頭の関与が重要である。

・教頭の立場の違い

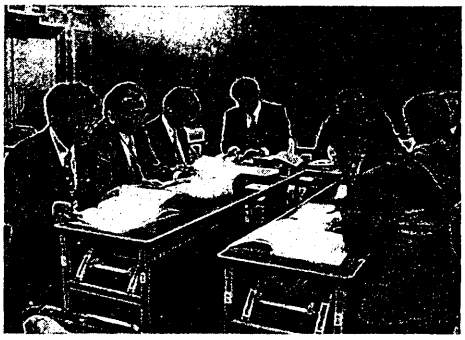
教務主任の経験を生かした指導・助言をする。新地区に異動した場合の新しい視点での対応をする。授業研究会に積極的に参加する。

3　指導助言

(1)　はじめに

二つの地区の提言は、新学習指導要領の主旨を踏まえた研究内容であり大いに賞賛できる。また、今年度が研究のスタートということで今後が期待できる。このような研究を通して改めて自校の教育課程を見直すきっかけとしても非常に良い視点を与えてくれたものと考える。

(2)　芳賀地区の提言に関して



・１年次の研究ということで、実態を把握し今後の研究に見通しを持ってスタートしたことは素晴らしい。

・調査項目の１つ１つが、新学習指導要領の改善を図る事項の具現化した内容に位置付けられている。

・「教頭の関与性」については、適時・適切な場で職員に関与する意図的なかかわりが見えてくる。今後『望ましい関与』の具体的な実践が期待できる。

(3)　上都賀地区の提言に関して

・「特色ある活動を通して、子どもたちは何を学んでいるのか。」をきちんと教師がつかんでいることが重要である。（どの方向を向いているのか。）

・課題をどのように解決していくのか。「学校組織を生かす。教師力を高める。地域の教育力を生かす。」など教頭として果たす役割は大きい。

・地域との関係づくりでは、学校の姿を外部に提供していくことが大切である。

・取り組みの中で、積み重ねの大切さを確認し、成果と課題を踏まえ工夫・改善を加えて、今後も推進を図っていただきたい。

（記録：金井　昌子・藤本　明英）

第１　分科会　教育目標・教育理念に関する課題（合同）
第３(2)分科会　教育行財政に関する課題（合同）

教育ビジョン達成のための教頭の役割
－校内での取組を通して－

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　君島　孝典　先生
提言地区　宇都宮・上三川地区　小学校副校長・教頭会

豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして
－子どもが生き生きと活動できる小中連携と行政との連携・協力－

助 言 者　栃木県教育委員会事務局学校教育課副主幹　　君島　孝典　先生
提言地区　塩谷地区　小中学校教頭会

１　提言趣旨

(1)　宇都宮・上三川地区小学校副校長・教頭会

ア　主題設定の趣旨

現在、保護者や地域住民から信頼される学校づくりが求められている。そのためには、校長が構築した教育ビジョンの達成に向けた取組を進めるにあたり、教頭の役割についての研究を深めることが、教育目標の実現に不可欠であると考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

これまで学校では、教職員の資質・能力や勤務意欲の向上を目指すため、教職員評価制度を運用したり、教育の成果を評価し学校経営の充実を図るため、学校評価を実施したりしてきた。本年度は、これらを、教育ビジョン達成のためのツールとして活用するとともに、その中で、教頭の果たすべき役割を明らかにすることをねらいとし、「教職員評価制度の活用」「学校評価の活用」について研究を進めてきた。

ウ　成果と今後の課題

①学校課題を、自己目標や組織としての目標に反映させ、達成状況の進行管理を行ったことにより、教育ビジョンの達成に迫れた。②年間を通した教職員との様々なかかわりから、多様な事例を収集できた。③自己の具体的取組の推進が、教育ビジョンの達成に深くかかわっていることを明らかにし、学校経営に対する教職員の参画意識を高めたい。④教育ビジョンを踏まえた研修を企画・運営したり、校内組織を見直したりして、推進体制を強化したい。⑤教育ビジョンやその達成に向けた取組内容を家庭、地域に発信するとともに、学校内外の教育資源を活かし、教育活動の充実を図りたい。

(2)　塩谷地区小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

本地区は、全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校を目指して」を受け、「生きる力」の育成と特色ある学校づくりの実現を図るためには、保護者や地域及び校区の小中学校の連携体制を構築し、積極的に情報を共有し協力していくことや、教育行政と連携・協力することが大切になり、また小中連携（小中一貫教育）は、今後の公教育における重要な課題となっていくと考え、この主題を設定した。

イ　研究の概要

３か年の研究の初年度である今年度は、研究のあり方や方向性を共有する段階ととらえ、①小中学校の連携のあり方や組織のあり方、②小中連携における行政と学校の連携・協力のあり方、③行政と学校の連携における教頭の関与性の３点について、地区内で小中一貫教育を実践している学校区での実践を通して考察した。

ウ　成果と今後の課題

①指導方針や指導観の共有や合同授業研究会の実施による教員の交流、相互の学習指導内容の理解などを通じて、学校間の連携が進んだ。②連携組織（部会）の改変により、指示の徹底や意見の集約、ミドルリーダーの活性化などを実現することができた。③行政の主導により、理念の共有や予定調整、環境整備などが円滑に行われた。④連携のための教育課程の調整は難しい面があり、さらに工夫が必要である。⑤小中で目標や内容、活動テーマなどを統一して、学校行事や総合的な学習の時間に取り組んでいきたい。⑥泉地区の実践成果に基づき、小中一貫教育・小中連携の推進を地区内に広めていきたい。

２　グループ協議内容

(1)〔え班〕

・当初面談では、学校経営方針と連動させて自己目標を立てるように指導する。
・中間面談は重要であり、教師は多忙であるが、機を見てタイムリーに声をかけるとよい。
・自己目標についての反省や状況などを週案に書いてもらい、そこから教師の実践のよさを見取る。また、学級の児童を誉めることも有効である。
・外部評価の結果から把握した課題は即修正するように努め、改善の具体策をすぐに実行に移す。
・地域に対し十分な説明をし、現状を知っていただく努力をする。
・小学校、中学校では、それぞれにニーズがあるので、すり合わせるのがむずかしい。
・中１ギャップ解消は効果があり、行政に働きかける必要がある。
・行政との人間関係をつくり、要望は行政にきちんと伝える。

(2)〔お班〕

・個々の取組を全体に示すことにより意識を高め、さらに教頭も共にかかわることによって、目標達成を実現することにつながるのではないか。
・１学期の評価をもとに話合い、２学期にどうするか改善策を出し、改善できるところは次年度を待たずに取組む。
・小規模校では合同研修を行い、授業や行事の交流を進めている。だが、大規模校では連携がむずかしい。
・行政とうまくかかわることが大切である。

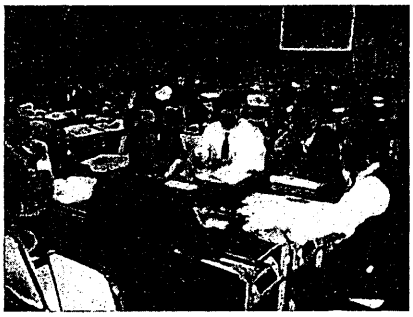
(3)〔き班〕

・教育ビジョン達成への道筋がきちんと計画に位置づけられている点が参考になった。
・教職員の参画意識を高める上で、効果的な取組みであった。
・教職員評価、学校評価についての取組が参考になった。
・校務分掌担当者に働きかけることはすばらしいが、教頭が主務者となると負担になるので、教頭としてかかわっていけばよいのではないか。
・小中連携として交流授業を実施したことで、小中学校の教科指導の流れの明確化が図られた。
・「小中一貫」と「小中連携」の違いは、どんな点にあるのか。
・小中一貫教育に対して、小中で温度差がある。それを解消するためにはどうしたらよいか。

３　指導助言

提言１では、教職員評価のあり方についていろいろな示唆があった。各教職員の教育実践が学校長の経営ビジョンに基づいたものであるかを、教頭が適切に把握・評価し、必要があれば修正することにより、教職員のモチベーションは高まる。

また、学校行事に対する地域の意見を機会ある毎に聴取しようとする姿勢は高く評価されるが、提言に示されたように、改善すべき課題が指摘された場合、即時に対応することは学校教育活動の充実・向上のためには特に重要なことである。



中一ギャップの解消をめざし、小中一貫教育への取組が進展し始めているが、提言２はその具体的な実践例の報告であった。小中の連携は教育課程のすり合わせ、予定調整など困難な作業を伴うが、それらをどう処理したかという報告は具体的提案として貴重だ。特に連携のための組織の改善により成果をあげた実践は、ミドルリーダーの育成・活性化に効果があったという点で、これらの人材の育成が課題である管理職にとっても参考になる実践として注目したい。大学から協力を得たことも、教職員の意識改革に有効に作用したようだ。

グループ協議でも、①外部評価では、学校側からの十分な説明が肝要であり、指摘に対して一部や個人ではなく組織全体として対応することが地域・家庭からの信頼を得ることにつながること。②小中連携については、多忙な学校現場において、連携のための時間をどう生み出すかという課題があるが、連携に要する時間の年間計画等への組み入れや、連携のための教員の加配などの配慮が必要であること、など検討すべき指摘があった。

学校において最も多忙なのは教頭職であり、今後益々多忙感は増大していくと思われる。健康管理に十分留意し、職務に当たってもらいたい。

（記録：池田　悦子・斎藤　　学）

第２Ａ・Ｂ分科会　子どもの発達に関する課題（小学校・中学校）

特別支援教育の推進と教頭のかかわり
－各校の現状と課題の把握－

助 言 者　宇都宮市立鬼怒中学校長　　髙田　芳紀　先生
提言地区　佐野地区　小中学校教頭会

すべての児童生徒にとって居場所となる学校をめざして
－学級経営の充実に向けた教頭としてのかかわり－

助 言 者　宇都宮市立鬼怒中学校長　　髙田　芳紀　先生
提言地区　那須地区　那須塩原市西那須野塩原地区教頭会

１　提言趣旨

(1)　佐野地区小中学校教頭会

ア　主題設定の趣旨

平成23年度の佐野市立小中学校の特別支援学級数は45学級で、平成19年度と比べると20学級増加した。各学校は特別支援教育を重視し様々な取組をし、教頭は学校や地域の実情に応じて校内体制の整備や保護者への対応等に努めている。そこで、教頭としてどう取り組めばよいのか考察することは有意義であると考え本研究主題を設定した。

イ　研究の概要

３か年の研究の初年度である今年度は、各学校の特別支援教育に関する実情を把握するため、質問紙によるアンケートを実施し、教頭としてどのようにかかわったらよいのかを考察し課題を明らかにすることとした。

①本市における特別支援学級設置状況
②教頭が考える特別支援教育の課題
③教頭として現在取り組んでいること

ウ　成果と今後の課題

教頭が直接、児童生徒や保護者にかかわっている事例も多く、そうしたかかわりが意識を高め、支援体制をつくる上で大きな力になっていることや専門機関等との連携について、教頭がパイプ役になり、児童生徒の支援や教職員の資質の向上を図っていること、個別の指導計画や小中連携シートなど、具体的な支援等を示したものが作成され、活用するよう試みられているが、より効果的に支援や指導に生かせるようにするにはどうすればよいか、特別支援教育コーディネーターを学校組織の中で機能させるためにはなど、各学校の状況を把握することができ、教頭の果たす役割の大きさを再認識し、共通の課題や悩みも明らかになった。

(2)　那須地区教頭会

ア　主題設定の趣旨

本市で推進している「人づくり教育」の視点に立った学校教育の充実を図るためには、児童生徒が日々生活する学級を充実したものにしていくことが大切である。また、本市は不登校の出現率も高い状況を踏まえると、全ての児童生徒にとって居場所となる学校を目ざす必要がある。

以上のことから、より充実した学級経営ができるよう、教頭としてどうかかわるとよいかを明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

イ　研究の概要

本市では児童生徒がよりよい環境の中で自己実現を図ることや不登校の解消をめざすために、hyper-ＱＵの実施と市の宿泊体験館の活用に力を入れている。

そこで、実施しているhyper-ＱＵの活用状況や不登校、宿泊体験館活用状況の実態調査を実施。その後、地区内の小中学校15名の教頭でワークショップを行い、調査結果の分析と充実した学級経営のために教頭としてのかかわり方を検討し研究を進めた。

ウ　成果と今後の課題

市の宿泊体験館で研修したことで理解が深まり、外部機関の情報収集を図り、その情報を教職員に伝えることの大切さが分かった。また、ワークショップを行ったことで、ＱＵの結果を学級経営に生かすことの必要性と、９年間を見通し、発達段階に応じて身につけるべきものがあることが確認できた。

今後の課題として、発達段階に応じてどのような力をつけておくべきかについて探るとともに、各学級担任が充実した学級経営を行うために、教頭としてどうかかわっていくかをさらに研究していきたい。

２　グループ協議内容

(1)〔あ班〕

○佐野地区の提言に対して

・学校の環境や職員構成によって違いがある。その状況によって教頭の対応のあり方にも、自ずと違いが出てくる。
・学校としての取組を、地域・保護者に発信し理解を得るために、教頭の後押しが大切である。
・教員評価を活用し、特別支援教育コーディネーターの質を上げていく必要もある。

○那須地区の提言に対して

・不登校児童等の対応(目標、方向性等)について明確にし、学校職員と保護者とが共通理解を図ることが大切である。
・教頭として、職員室の透明性やコミュニケーション力を高め、風通しの良さを保つ。

(2)〔お班〕

○佐野地区の提言に対して

・教頭として、特別支援学級の授業に積極的にかかわり、実態の把握に努める。
・専門機関への橋渡しをし、連携を図る。
・人的配置等、見通しをもった関わりが必要。
・教職員の意識の高揚に努める。
・保護者や関係機関等との関わりを深めるために、特別支援教育コーディネーターとの連携を密に図る。

○那須地区の提言に対して

・ＱＵの活用については、教職員の研修を深めるためにも研修会の開催にかかわる。

(3)〔く班〕

○佐野地区の提言に対して

・特別支援教育の体制や、コーディネーターの職務内容も様々である。教頭として関係機関との連携や全校体制の構築から、個別事案の対応まで、柔軟に対応する必要がある。
・個別計画については、子供の状況に応じて適宜訂正を加えながら、しっかりと引き継いでいく体制を作ることが大切である。

○那須地区の提言に対して

・小中間のギャップが子供のつまずきとなり不適応を起こしている。人間関係や自尊感情・自己肯定感を育てていくことが大切である。
・教職員が小中両校種の経験があることが生かされ、そうあることが望ましい。
・ＱＵが有効か否か、科学的な調査資料として、この研究の成果を大いに期待したい。

３　指導助言

研究初年度なので、取組の糸口や課題が見えてきて、課題解決の方向性がでてきていたのではないか。また、グループ協議での話し合いの中にもそのことがうかがえた。平成25年度にはすばらしい研究成果が出るものと思われる。

○佐野地区の提言について

・特別支援教育を推進していく上での教頭としてのかかわりは難しい。特別支援教育としては、特別支援学級の子ども、通常学級における支援が必要な子どもと２つの面で考えることが必要である。
・特別支援教育推進のため小中連携の必要性や教職員全体の資質の向上、特別支援教育コーディネーターの機能があるが、コーディネーターについては校務分掌に位置付けていると思う。
・教頭のかかわりとして、児童生徒・保護者・教職員や関係諸機関へのはたらきかけ等があるが、特別支援教育の課題として、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行うことが名称が変わった目的だと思うので、一人一人のニーズに対しどう支援していくかを次年度の課題にしてほしい。

○那須地区の提言について

・すべての児童生徒にとって、居場所のある学校が一番大事なことであり、「学校が好き」が児童生徒に求めたいことである。
・鬼怒中学校では昨年度から要配慮生徒への対応として「かがやきルーム」を設置し指導員のもとで生徒の居場所としている。
・県の調査によると、不登校の児童生徒は減少してきている。楽しく学校生活を送るための検査としてＱＵ検査は有効であり、児童生徒への支援、援助、指導の手立てとして活用できるが、そのかねあいが大事だと思う。また、メープルは、色々な面で子どもたちにとって楽しい場所なのだろう。
・次年度以降は、適応教室に通級している、保健室登校、遅刻早退ぎみの児童生徒を対象としたＱＵの実施や教師側から教頭にしてほしいことのアンケートがあってもよいと思う。

（記録：鈴木　幸江・荒居　包夫）